

はじめての古文書講座

其の四 於成の手紙を読んでみよう (2)

前回、この於成の手紙が書かれた年を文久二(一八六二)年と書きましたが、当時の女性の手紙には日付が書かれないことが多く、於成の手紙も同様です。それでは、なぜ

「文久二年」と判断できるのでしょうか。その手がかりは、手紙の②③⑤行にかけての、

「まづ御機嫌よく(まつく御機嫌よく) 京と御
発駕) 御参ふの(参府) 御祝き申上ま
いらせ候)」にあります。(男性であれば「申上候」、女性では「申上まいらせ候」という文

言はよく使われます。それだけに、文字のくずし方もおおきく、のどの部分が

「ま」で、どの部分が「い」なのかを判別することはできません。この形を見たら「まいらせ候」と読むんだと憶えてください。なお、私の手元にある「くずし字辞典」には8パターンの「まいらせ候」が挙げられています。それだけ頻出の文言だということでしょう。

兄・斉彬の遺志を継いだ久光は、公武合体と幕政改革を念頭に、文久二年三月、
一千人余りの兵を率いて上京しました。さらに五月、勅使(天皇の使い)を伴って江戸へと赴き、中央政局へのデビューを果たしましたが、久光が江戸に行った(参府した)のは、この時だけです。このことから、この於成の手紙が書かれたのは「文久二年」だと判断できるのです。

また、6月7日(日曜日)まで開催中の企画展「あの人の家族への手紙 幕末維新」では、今回の於成の手紙に先行するものと推測される、父・久光の手紙の案文(下書き・控え)も展示されています。京都から江戸へと出発した五月二十二日、久光は、薩摩にいる

藩主・茂久や家老への状況報告等と併せて、子どもたちへも手紙を出したようです。案文には息子たちへの手紙の部分に「久治」「珍彦」「忠欽」「久封」「忠清」「真」ら5人の名前が、娘たちへの手紙の部分に「於治」「於珍」「於寛」「於成」の4人の名前が見えます。